

親子で遊ぼう！ただじゅんのあそびっこ

北町保育園の今年度の共育講座は11月7日、「親子で遊ぼう！ただじゅんのあそびっこ」と題し、ただじゅんこと多田純也さん（舞台実演家・表現活動インストラクター）をおよびして開催しました。多田さんは毎年1月の「新年のお祝い会」で獅子舞を披露していただいているので子どもたちとは顔なじみです。感染症対策のため、場所は園庭で、対象は幼児（3〜5歳児）の親子のみになりました。

まずは新聞紙でおそろいの帽子を作ってからスタートしました。これだけでなんだか親近感がわいてきて楽しい！



ただじゅんの太鼓の音でさあはじまり、はじまり！



ブラコップで作ったロケットを飛ばす



マネっこゲーム。「木になーれ」の合図でみんな木のポーズ

のように飛ばす遊びは、コツをつかむまでが難しく、大人も大苦戦（笑）。次から次へと発展していく遊びに、子どもも大人も夢中になりました。



紙皿で作ったカザグルマ（?!）、指にはめて走るとクルクルまわって、とっても楽しい！

はじめは緊張して不安な表情の子が多かったのですが、帰るころには、ただじゅんマジックにかかったかのように一人ひとりの表情が明るく輝いていて、とつともうれしくなりました。画面越しのゲームが主流の今の世の中、身近な素材でこんなにも楽しく遊べるのかと、改めて実感できた日にもなりました。なかなか外に出られず悶々とする日が続いていますが、おうちでもすぐできるものばかりだったので、これを機会に親子での遊びの幅が広がればいいなと思いました。

後日、保護者の方にアンケートをお願いしたところ、たくさん感想をいただきました。また、職員からも大きな反響がありました。コロナで外出しづらい状況の中、ごす時間が長くなっていく中で、身近なものを使って親子で遊ぶよい機会になったと思います。「ただじゅんさんに会ってみたいかった」という保護者もたくさんいて、ただじゅんの魅力を一緒に共有できたのもよかったです！

（北町保育園保育士 阪本彩乃）

共育講座アンケートより

- *子どもだけでなく私も心から楽しみました。忍苦っこや宝探しなど子どもたちがわくわくする内容で、はじめは恥ずかしさと不安で消極的だった我が子もすぐに夢中になっていました。（保護者）
- *前から気になっていた、ただじゅんさんのイベントに参加できて良かったです。楽しかったのと同時にコミュニケーションや遊び方など、大変参考になりました。（保護者）
- *道具や特別なこともなく楽しく遊べ、笑えることの貴重さを学ばせてもらいました。さっそく夕食時、我が子と「お話つくりゲーム」をしてみました。意外な結末にみんなで大笑いしました。（職員）
- *勝ち負けに関係なくカラダも心も解放され無心になれて楽しい時間でした。こういった体験が子どもにとって大切なことを実感しました。（職員）



「いないいないばあ」

文：松谷みよ子
絵：瀬川康男
童心社（1967年初版発行）
20頁 / 21 × 18.6cm

半世紀にわたり愛され続けてきた赤ちゃん向け絵本。読み進めるたびに、ネコ、クマ、ねずみ、キツネの顔が「ばあ！」と変わるところがおもしろい。大人も赤ちゃんも笑顔になります。その笑顔の繰り返しがこの絵本の魅力です。

「ラチとらいおん」

文・絵：マレーク・ペロニカ
訳：徳永康元
福音館書店（1965年初版発行）
44頁 / 16 × 23cm



弱虫で泣いてばかりいたラチが、小さな赤いライオンがそばにいて少ずつ強くなっていきます。どんな子どもの心の中にも多かれ少なかれ住んでいる「弱虫な気持ち」に共感しながら、「なりたい自分」に一歩だけ踏み出す勇気をくれる絵本です。



「生きる」

詩：谷川俊太郎
絵：岡本よしろう
福音館書店（2017年初版発行）
44頁 / 26 × 20cm

新型コロナウイルスにより私たちの生活が一変した今、当たり前前のごとを尊く大切に感じながら「生きること」の意味をもう一度見つめ直させてくれる絵本です。巻末の谷川さんのコメントも心に染みます。

大人の方にも

（文字づかいなど、一部手を入れさせていただきました。編集部）



◆こんなときご利用ください
 ・保護者の就労・求職・通院・職業訓練・通学・看護・介護など。また保護者の傷病・被災・事故・出産・冠婚葬祭などの緊急時。
 ・保護者の子育て不安・リフレックシユなど。
 ・育児相談、健康診断等で、お子さんが保育園での保育が必要と認められたとき。

◆利用日・利用時間など
 ・月曜日～金曜日の9時～17時（土・日・祝日・年末年始休）
 ・1歳以上で、離乳の完了しているお子さんから受け入れています。板橋区発行「すくすくカード」のご利用もできます。
 ・一日1時間～8時間。（ご希望の時間帯で利用できます。）
 ◆お申し込み・お問合せ
 ・直接、陽光保育園へ。
 ・TEL 0426-11068、受付時間10時～17時
 ・緊急時以外は、なるべく利用される10日前までに申し込んでください。
 ・事前に面接をしていただき、利用日・利用時間を予約していただきます（親子でおいでください）。
 ・利用料その他、詳しくは陽光保育園までお問い合わせください。

ひもじい思いだけが……



加瀬 瑠美子

私は昭和15年に東京・日本橋で生まれました。まもなく板橋に引っ越し、板橋第一小学校に入学したのは昭和21年でした。小さかったので戦争の記憶は少ないのですが、それでも空襲の怖さはよく覚えています。氷川町に空襲があり、借家は丸焼けになりました。空が真っ赤になったのを覚えています。親に「逃げるよ!」と言われて防災頭巾をかぶり、祖母と母、兄と弟（赤ん坊だったので母に負われ）と私で第一小学校に逃げました。みんながバラバラにならないよう、紐で汽車ポッポのようにして逃げました。夜、炊き出しでおにぎりが食べたい「白いご飯じゃないといやだー」と泣き叫びました。その後、氷川町8丁目の第一小学校の裏の家に引っ越ししました。学校のすぐ裏で、竹林を横切って学校に通うことができました。戦後、もう一人弟が生まれ、私たちは4人きょうだいになりました。母方の祖父母は本所で八百屋をしていました。3月10日の大空襲のとき、板橋の方へ逃げてきました。死体の中を歩き続けてポロポロになり、お化けのような格好でした。一緒に逃げたおじいちゃんは途中でぐれてしまい、どこかで焼け死んでしまったようです。骨を拾うこともできませんでした。だいぶ後で、東京都が空襲で亡くなった人を調べ始めたとき、兄がおじいちゃんの名前を登録しました。家族として、おじいちゃんへのせめてもの思いでした。戦後は、わずかな配給では食料が足りず、母が兄を連れて千葉の方に買い出しにいきました。芋や野菜を買ってきました。父親は軍の研究所で働いていました。仕事の内容について私たちに話さず、わかりませんでした（戦地に行かなかったことをうしろめたく思っていたのかもしれませんが）。右手に傷がありました。戦後、父は社会党から区議会議員に立候補しましたが、次点で落選しました。戦争に対する反省や後悔がそうさせたのかなと思います。父は「共産党の人は立派だ」と言っていたようです。政治に関心があったのです。そういえばロシア民謡を歌っていたこともあり。何が辛かったといえ、いつもお腹がすいてひもじかったのが一番悲しい思い出です。戦後、給食はありましたが、すぐくますかっ!（板橋区在住）

※他誌に掲載された手記を、本紙用に加筆したうえで掲載させていただきました。

お父さんの出番です!!

二人歩記
 なせ（お父さんの出番です!!）なのか……。まるで未だにお父さんが育児や家事においてあまり活躍していないみたいではないか。お父さんの心の声が聞こえる。「自分はそれなりに家事も育児もやっている。妻に負担が偏らないよう配慮しているつもりだが……」。この「それなり」と「つもり」に反感を感じるお母さんはたくさんいらっしゃるようだ。「あなたのそれなりの家事と育児は私に比べたらお話にならない。それで家事、育児をやっているつもりなの。それに配慮して何？あなた配慮してくれてたの？仕事だ、趣味だって自分のやりたいことばかりやって、やれていいわね。私なんか自分の時間なんてほとんど持たないのに」
 ある日曜の朝、残業後、仕事から帰ってくると、やってあるはずの洗濯や食器の片付けが何もなされていない。疲れて眠い体に鞭打ってそれらをこなすと、思わず寝ている妻をおこして言ってしまった。「なんで寝てるの。寝るのは俺のほうだろう」。このときの私の気持ちを一言でいうなら、「俺ばかり大変な思いをして、妻は楽をしてる」。この「するい」は、幼児期に獲得する観念である。この「するい」が原因でよくケンカもする。「あ、〇〇のほうがあめちゃん一つ多い!」などなど。この子どもじみた響きのある「するい」は、取りも直さず「公正さ」を求める声に他ならない。社会的動物である人間は、かなり早い段階でこの不公平を憎む観念を獲得し、大人になってもしっかりとこれを保持している。（そつじやありませんか?）
 この公正さの実現を阻むものは何か。「やる気はあるんだけど疲れちゃって……」「小さいときはお母さんが一番」「あなたが作った料理のほうが喜ぶのよね……」「お前（あなた）のほう時間が余裕があるんだから仕方ない」「それぞれの家庭にそれぞれのやり方があるのでは」。こうした声の背後にあるのは怠惰か、傲慢か、無関心か、はたまた理性か。いずれにせよ各人に備わったセンサー「するい」が発動したときは、すぐに黙殺を決め込まないほうがいい。子どもたちを見よ。たった一つのあめちゃんのために全力を尽くし、かくも野蠻で美しき関係を築いているではないか。
 お母さんの心の声が聞こえる。「それであな、私にそれ言えるの？逆に、言われたいの、変わるの?」「……そ、そりゃ、もちろん」(言うは易く行うは難し)。センサー発動。「……じゃあ、君は?」
 (桜台第二保育園2歳児・5歳児の父 百瀬真太郎)